



和漢文操

行類
序類

辭類

三

中村俊定文庫

文庫 18

195

3



和漢文操卷之三



○行類

△連他互照序

連二房

或おあしきと此指句と書するに和漢文素
の遺跡あつくはよはるの所多く御めおの
まゝにいり楯の香花もあはすりもみ相の
今様よくと治の歌いともある一はれともお
床かよふまじりにあはれもあはれもあはれ



を為のせとよまかりて色辨はけ春句とめかして
我れの上よけしとたり

播のうつらんやほしむと

時をまうを歌ふやあ相

かくてを為のせのけしけしとほしむと播と
よ本はし情とぬくましとと連歌之能譜と
し相を時る此古歌とめかしてと能譜之
連歌とつた二書とまゐりておめむとめかして
まと言わの余情しとと連能とつた一虚字の
を照してとちとちわんらま辨の先後とま

を我くも詞とけしとおよかめしむるを
して短繁のうけしとまゐりてまあめしむるに
幸と暗記してほらく凡新めしととありて
縁起と詩とちとつた新駢あり轡向あり能朝
いそにけしとつた連音あり能譜ありつれも
るの妻ありとつた妻ありとつた妻ありとつた妻
けしむと連音ととつた妻ありとつた妻ありとつた妻
かきしましとつた能譜と虚とつた妻ありとつた妻あり
同とちとつた妻ありとつた妻ありとつた妻ありとつた妻あり
ふ誠と先後とつた妻ありとつた妻ありとつた妻ありとつた妻あり

古今撰集の編書と誦讀之連歌とむき
その世の言篇の誦讀師の伝與つ連歌の
その詞の誦讀あるは誦言連歌の言と
としては編書にさかんにや人の編の誦讀
に傳へてそのの能文とやけ仲ら禪家の
能言とありて誦言のほどもはなりける
いふ松陵の能文と云ふ歌とさくありの能
とさくありて又傳の世に連歌の能ある能
の能ある能は連歌ありて連歌にも能
あるはんや連歌の名と誦言のあやう

誦言の能の傳りて古今傳の能ありて
の能ありてやうも連歌の能ありて世の
めくはありてななく能の能の能の能
誦言の能ありてやうも誦言の能ありて
の能ありてやうも誦言の能ありて
も誦言の能ありてやうも誦言の能ありて
あな言下に長く誦言の能ありて
誦言の能ありてやうも誦言の能ありて
誦言の能ありてやうも誦言の能ありて
誦言の能ありてやうも誦言の能ありて
誦言の能ありてやうも誦言の能ありて
誦言の能ありてやうも誦言の能ありて

誦言の能ありて

此名姓とす用ゝて所合をふ向ふり其と
 へんぬ野の月せしや連音のまふとくしんあ
 能活の形ときまらうくせしや上草に弱のまあり
 とつれまふ地やまむまをれ連歌と能活とん
 ぢりり和音のえ申よとせし世に中まふ
 へく家まふねいそ節とけ節よのまあり或ん
 連歌と能活とも或ん能活と連音とも能
 活と詩の人の能活和と交るうくくを能
 活と連音の情のまふとまふいれり能活のま
 うつりと併て連能一座の所合ありと能活

のま地と面くのり題うて大和の風物のみよ
 せむしうとあ一節當の流とほく世代此
 人知とてたまうくむまよ能活とてたま
 む一節とてけ一節と能活減ねの大妻
 うくするよ異廢のたうくまむむ可引り
 人知のまらるるにまふとけ守り詞とけ
 能活の序よのまてと能活はらるる能活
 けらるるてけ此の色この人よ連音の艶活
 とりてせくてかうよ連能ありとまむとま
 情のまふとまむとまむとまむとまむと

くらむいゝた菱門の舟とくらゝと一軍と
 連絶のしらべにきくうい耶那よめあゆ
 とまひていしききき連二つとていし
 てかくとを眼の唇とていしきき一
 百世の功とてけきてそのまらとていし
 くらゝ清きあなとていしきき一はは宿
 とらふあふゆとていしきき

惟時享保三年の十月十二日親爵の将お
 し香と地て薰誦再おとていしきき

也



連絶歌仙行



校正 珍

まりまきげそののねこれいしきき
 んのそのれの美命とていしきき
 ありしらぬ人もあはれゆきいしき
 集よりりりりりりりりりりりりり
 甘ね下や月の乳あまきききききき
 への向しそのあなれよあ入
 うらまはにをれあし信連二つとて
 純く香ゆしきりりりりりりりりりり
 純 由二 珍 乙 純 蓮二

通おろしむまの神は雲にあり
けり此幸とていけと得んを
年とてたえ後の事も解たて
そのひの雲は青ももも
お膳と神子もたをたれ入
をるるまも此旅のやと
便船もこちへもり 風吹
小貝ひたれや汐のりあり
たもとて得もり 夕月お
くく枯もまぬ心此 高き

二珠由純二珠由純二珠由純二珠由純

時ふもて雲にまもり 秋のお
の森とらまぬ親音の下
写かりしけりし村かき
お厨もせき 國替のあね
こころに 心をまもり
質なのゆはまもり
のまに話もあかくむら
鮎のか減の 一子おは
まびきもやるたの巻にま
鐘のまもりまもりと物末

二珠由純二珠由純二珠由純二珠由純

月に入朝のりぬのあつたに

あつたにきいひ舞ふはま

随分のすん中へまて 栞くつり

いふうらちれくんとはれり

塵おのり第もたせとに 抱あひ

いやくしやくやくゆめ あらぬれ

あやうり暖筆集とるれは詩集

むくくは馬代ゆくと也

珠 由 二 純 由 二 純

○作者列傳

正珍ハ校本氏ニシテ伊勢ノ山田ニ師範トス連歌ハ里村家ニ通称セリトソ庄年ヨリ家産ニ

抱ラス家法ハ建治ノ式目ニ據テカラ凡美ハ宗祥ノ方角ニ遊ル一生不羈ノ隱逸人ナリ「光純ハ其内ノ高才ナリ博ク孔内ノ詩書ニ通ス姓ハ本林氏ニシテ師儼ヲ家トセリ東葉ハ今ノ俳名ナリトフ乙由ハ同ク山田ノ産ナリ當時ニ俳諧ノ名匠ナリ音ハ東也坊ニ夜寝席シテ新百韻ノ七ニ遊ル中ハ涼菟舟ニ鼓舞シテ之足後ノ曲ヲ尺ノスニ集ル俳諧ノ変ニシテ祖公羽儀後ノ時世赫ト云ハ其後中川ノ家ヲ道テ今ハ本林ニ遊リトフ

△俳諧求韻序説 糸短歌行 土方以立

眞儀抄云歌と韻字と用ハさあり之十一

の歌と才と句の終字と押韻と一才と句の終字と
 終韻と一韻とつらつらもささあふとと也歌とい
 又七歌と才と句の終字と押韻と一才と句の終字
 と二韻と一かくのこく轉して韻とつらつら短歌
 ありとと短歌とい喜撰式ありし新撰髓腦
 古今集よりかきなむ或云詩よりこのたて
 歌と我國の詞あり聞とありしわもあはれ
 いふらり一短歌八賦あり長歌八五言の詩
 旋頭二言ハ江南の曲混本二言ハ越調の詩連言
 ハ聯句あり廻文ありかきひくありとあはれ

準ゆり不しとありしありと也言短言也といはれ
 ありし奥儀抄よりかき存とらあはれ他借と求
 韻のゆたあはれと遠くと奥儀抄よりかきと
 近くとたぬ又濫と假名のつらつらとつらと
 況や連歌の聯句ありしと他借しと韻字と
 ことして俳諧と連歌とつらつらとあはれに
 栢梁臺の聯句あれとつらつらに酒折宮の連歌
 ありし漢武帝も日本武もけるの祖とあはれ
 せむく東韻の或同と奥儀抄も二種の韻例
 ありし又句と藤韻とあり言詠と細韻とあり

麻韻とやまたまの音韻とつひ細韻とつひの
言葉とつひの歌の束韻とつひ二行と新の巻お
ありて短歌とつひ長歌とつひ雙反本とつひ
短歌と準とつひ絶句と

雙反本

以テ六句ヲ互ニ絶テ才ニ句終字ヲ互ニ初韻
才ニ六句終字ヲ互ニ終韻

あけらるればあけらるればあけらるれば
あけらるればあけらるればあけらるれば

短歌

以テ五句ヲ互ニ絶テ才ニ句終字ヲ互ニ初韻
才ニ五句終字ヲ互ニ終韻

あけらるればあけらるればあけらるれば
あけらるればあけらるればあけらるれば

長歌

以テ四句ヲ互ニ絶テ才ニ句終字ヲ
互ニ初韻轉々如此

あけらるればあけらるればあけらるれば
あけらるればあけらるればあけらるれば
あけらるればあけらるればあけらるれば
あけらるればあけらるればあけらるれば

はれい和風の韻例とつひに和歌とつひ句ありて
二初らるればあけらるればあけらるれば
あけらるればあけらるればあけらるれば
あけらるればあけらるればあけらるれば
あけらるればあけらるればあけらるれば
あけらるればあけらるればあけらるれば
あけらるればあけらるればあけらるれば
あけらるればあけらるればあけらるれば

のるも換韻の言句も同韻とわくわくも今
の論より用ひかゝるふありとあらんと漢家の韻
例より長篇の言句も勿論として歌行のれは換韻
と用ひかに或と四句も換へ六句も換へ八句十句
ちりも粗ありて一奥儀の言句も後助ありてや
今や氣流の例とすして此借の言句も東韻とす
ちの言句の尾字と初韻より才二才にへ言句
ぬじりて言句の言句と韻とも六句四句とも韻と
換むとする時次の言句も他韻とぬじてその尾字
と初韻とを言句の尾字と用ひりては

はたして漢家の律法も我々の後和の語句も
とすりてありて才言の尾字と初韻とを言句と
一篇とするありて一韻と用ひりてや今や二巻の
換韻は短歌行とするに韻と別一歌行と六句も
韻と別一長歌行と八句五韻とありて一詩の法
六六も六八も七の付し一篇六章の時ありて
韻とわたりて換を言句に言句に百韻の時へ中間
の言句と八韻とありて言句と假名の二韻十字
より言句と不自然ある言句とありて好し
の言句とありて假名と真名の韻例

求韻短歌行

良壺峯

香久山のこらにわすやを花れ

雪もふふ馬折マホヅリ　とくかく

扇とて霞くむておるくはく

湯あしゆくたは塵とすけ

翠染を何そく余ふとすあり

草りの穂し橋のあらしへ

山の端北月あらくくまらま

塵も萩ふく風のくハ

蓮二

方壺

乙久

二

峯

文

壺

二

孫又故し秋とまきいさる松老壺

た官もみ石つきくひてなく

言をさるんわさるわかつりむ

はあうふ船と海む命らら

大塚や中塚し波のまらうん

ひりどからふとまとのひね

ひのおれ猫めかうひの産と卵

ちられ世いし小園伽の一桶

さうそくやと詞やお脚て

染糸める北かうといらく

二 峰

二 壺

二 文

二 峯

二 壺

二 文

二 峯

二 壺

二 文

二 峯

きれそく此は種も水も月也 就
 穠あはくちまを殿もあふく
 出かりも家くもろの音とあふて
 命とけしきあふれりけ
 幕ひくむにうの奥あふて
 連歌を奪ふ 子女のまこ

立 又 二 降 又 二

○保云は行ハ連音之能借とやんむ者句と地鏡の
 佛割衣と揚めより一か節を合て姫番の句は七
 五とと席の二句にさうりて殿のら風と手懐たれ
 中ゆららふ入席のあし吹らるる萩のくらんと殿の

一子とよもはとよもと錯綜して連歌の裁ハ
 と例とよもはとよもはの言授とつてとれと
 勢倒の絶妙と称とつて今もく世天の事行
 とんねん奉句のまの裁断あり方取まのつるは能借
 の求韻とて此書と百世の濫觴とんも奉句と
 此式の物志緒して我々のま配とまふあも幸
 二句まの頂とゆりりて黄老人の所法とすうせ地と
 是かく表れあやまちと道むと我々連二のつるは
 ありむしむ羽の羽とつては司にあふりて宗に
 寄衣とて連能の古懐事とあふりてのつるは
 中一宗祇を人のまゆの巻と奉句とせこの語と
 ちりもや聖廟のまに宗祇の服ありはるる而韻の

名張りしつり七句目は素春とせりて老人は奉句と
らしきものもやを本よむとては向のむありあつた
思をいしつ創しとて若句の方と再進まき
敏捷の妻と我家の替身あうし連歌とせり連歌
と奇よしと似れしと今かく求韻の自在とあかひ
て千歳の孔子も少くされあむ領挫と能讀の
そ地ふれい例の虚実とおおせりし我誠と北行此
大膽ちり評者も一掃とせりしとあしと例の
そそ也作者と越の石動^{イヌ}は位もつれし和漢の
惜まうして和漢の例より喚び松子岩のこい
と子も地と文操の選場とて禁と廣記と
そいれありとめくそ記と互見と一

求韻歌仙行

川乙由

り秋のるくし海をひまふら
赤瓦山し草のまのまわれ
持たしと書けの園とちらかけ
捕殿あふしとち喉の中
一草のふれし草司とねら命
むてふらふれのまふか
ねの本れ草のふらと持く
打らふらふらとめらゆ子

兔土
蓮二
表如
土由如
二如

蓮うわげくうあくけき甚弱い
 海く布中とあつる金つん
 氣うわげくうあくけき甚弱い
 馬子うわげくうあくけき甚弱い
 わくさく七比丘虎うらう浦町
 肉う月う月うあつるれ
 有印せもんのみう一雨に
 じうう坊う和活の指あへ
 獲ううれまうお節う一歌き
 うのちうられえしう川うあ

由二如由士如二士由

善形ううとけきう
 地をうあううとわを危傷
 起ううおまうう子のうれうり
 ちうのううれう南ううう
 耳ううううのううう
 便うううう比敷のせんう
 らせあせう傘のうううう
 牡丹うあなうううう
 入れのう本とほりううう
 冠ううのううううう

如二士由二如由士如二

我名と削の華、表人よりつらむらひりて、文鑑に
一、歳行のこも、遺稿に、此の又、幸しく、おぼく、おぼ
と題を、し、し、先師、十名、の、も、一、ある、一、

△大和聯句序 五歌仙行
渡白狂

詩歌者夫、風雅之花、而所謂詩、變而為
騷、騷變而為詞、皆可歌、泉則詩、與歌者
從音訓之違、永詩了、則曰、作、若、永歌、了、
則曰、訓、歷、總、者、道、之、優、游、而、遊、俗、談、笑
語、共、不、忘、意、之、風、雅、之、謂、也、乎、左、在、則

而物無體用之差別者、字行、義、暗、許、之
黒豆、而謂、詩歌、無、姿、情、之、論、矣、夫、先、師
大昔、所、遊、洛、之、相、國、寺、日、有、一、聯、之、名
對、鳳、穿、桐、倒、掛、章知客、鏢也、妻在周、白龍子
此一對者、膾炙其世、而稱、倒、掛、與、在、周、
之意、對、止、乎、遺稿、鏢書、二、倒、掛、ハ、東、坡、カ、詩、ニ、出、テ、鳳、ニ、似、
掛、ル、故、ニ、各、下、カ、リ、ト、フ、在、周、ハ、齊、物、論、ニ、鏢、ハ、鏢、也、堂、ハ、在、周、
也、ト、云、ル、然、レ、在、周、ハ、鏢、ニ、似、ト、シ、テ、鏢、ハ、鏢、也、堂、ハ、在、周、
則、ニ、右、語、ノ、誤、入、ナ、リ、ト、對、ハ、五、山、ノ、會、合、聯、句、ニ、座、多、子、近、モ、
附、ク、シ、ラ、ト、對、ヨ、リ、各、ラ、稱、キ、也、以、テ、鏢、子、ト、云、リ、ト、フ
從、是、以、西、湖、南、之、向、金、遺、聯、句、之、名、著、
與、所、白、龍、子、與、者、先、師、之、聯、句、名、也、其

後之祿之始也。至在武江之區，蕉庵而
 素堂與故翁夜話，之次撰之。日月日記
 述往古，評漢和之為不自在當時論聯
 句之為不吟味而其夜試有一聯之隔
 對。唐土有芳野櫻，將妬海棠。素堂揚州
 無。伏見桃被惡山薑。白龍子。○聯大和聯句之
 錫。有以故古今集。他諸歌。摘。唐土。芳野。ト云。本
 ヲリ。聯句ノ結構ハ和漢ノ兩用ヲ通ス。キ。及。ニ。山薑。本州
 ニ出。白木。各。揚州。産物。ト。柳。李。ヲ。忘。物。ト。ト
 然。此。對。稱。所。八。唐。揚。州。各。三。州。ノ。地。形。ヲ。對。增。シ。テ
 山海。薑。常。ノ。一。各。ニ。用。フ。附。合。ス。ル。意。對。ト。モ。字。對。ト。モ。是。テ
 定規。ト。只。大。和。ニ。聯。句。ノ。體。ヲ。シ。ト。フ。彼。記。ハ。漢。和。ヲ。モ。論。談。セリ
 如斯。有我家。建詩聯句之一格。而和漢

其詩有聯句而其歌有連系事者從詩
 歌之獨有面白麼我云人云聯其時之
 意也則可弗諸越之人與大和之人為
 物語詩歌矣耶。社月夜兮花且兮見
 給侍人之心心而知召賢敷愚也。鳥矣
 貫之之詞麼為此意矣。手抑泉聯句之
 始則或曰上則唐虞之虞歌下則漢武
 之柏梁共或曰聯句古無此法自韓愈
 孟郊始共或曰諸公已有聯句之詩謂
 自韓愈始者非也。共於茲思聯句之滋

鷓則如蘓瞻與蘓由之應對或者四言
或者六言五言七言者勿論而為言合
上與下則漢曰聯句居和曰連歌歷古
集之證文麼數多也左有厚纂為成一
卷物者但可謂自韓孟始尔哉左有
如國鷓納涼者連續一題之意而或者
成百韻成五十韻言則謂兩所之詩矣
其後我朝如江心策度者顧前起後而
為似今之連俳六譬則如以秋月對山
堂以梅花對荊棘唯合十二門之名同

可通做名真名之用為也率哉謂大和
聯句者其樣似鳳城之五言聯而全用
我朝之俗談居其言學羅山之七字城
而爾亦不為者也其意如何也則聯句
者本出詩之變律而對其字其字之姿
了共不運其題其題之情譬則如以牛
對僧以松對鶴句對字對者不及言意
對知聯句之作不作了哉然則月尔者
有日星之體而花尔者有枝葉之用則
佳如玉璫與系柳漢如山色與水光在

可以鳥之聲對梅之香了則介部隨類
而為附分重毛其取可謂聯句之註
用犀哉于然對十二句之字耳則從乾
坤時催之二句不及器賦食服之差別
態藝虛禮者似有各而無形而矣今也
我家之所建者每句每字分姿情之品
而逐一一定附方之法譬則以古風對新
月此類曰文字之姿矣字面者對以月
了共古風者凡俗而弗天象故也譬則
以對腸對團子此類曰文句之情矣字

面者全不對了共對腸者言麥粉之搗
入則也此外隨字行之輕重而不離姿
情之二事者爰以郭公之一卷可知大
和之凡例也初謂古聯句之法者不知
為孰代誰人之捉凡從五十韻至百韻
然共今之聯句者長了則之數韻礎自
有自己之爰要先者從二十四之短歌
行用之十六之歌仙行而長其唯可限
長歌行矣乎則五山之標式亦麼有
歌仙聯之沙汰與所次謂去嫌之古式

者所謂地名人名氣植之類者都隔
二聯同字者量字行之輕重而可隔
句九句共予曉其法其式之道理則如
產部之習心經欲覺無的果今止將為
大和之聯句亦者衣不替連飾之式今
四折八面之表裏而可效四花八月之
法式矣乎此故今之歌仙亦者以始中
終成折附止矣四十四麼五十韻麼效
此例些爾有則曰連歌之漫和居曰能
諧之和漢共成者可任其產之宗近厚

哉乍去擔行回華對類初予士麼偏冬
僧麼互著述而知平反事者殆無所越
聯句物唯從東冬至咸嚴迄知今平色
之韻字則上去入之之韻者有我不知
而知之理果在有人者不及姿情之塩
梅溪尋城南兮侯櫻城西兮效韓孟江
策之達者而眼儒書兮眇佛經兮混尚
覺切々之故事古語些知和訓漢音之
可假用焉於典松待之訣其則縱夫謂
學向之果敢遣矣斯而知其學之用與

無用了則知詩歌有今日之優游知聯
句有姿情之品而誠被謂和優之文人
矣然則聯句之為用也識論語之所謂
蒼皇之名而謂為學文之始終矣夫

聯句歌仙行

郭公松獨立芋頭雙
橋落羅離卦
王炊新月芋
始靈一驚山雀橋尼子
杜若鶴雙橋尼子
家榮調肺藏
羊堀古風薑
思之隱芋頭雙

沽諸茶亭袴
園寺鷄無伍
顧身浮竹他
衛士待油賣
平家花將敵
中
彼岸錢團子芋頭雙
身負常嚼老
題騁源之位
捧文梅早咲
娘鑑照親園
痛也不綿裏
桂川猿有整
俄渡淺茅荒
代官傳米商
秋氏螺先茸
節供化蚌腸橋尼子
口滑頓為倡

式師又五郎
先業竹初株
世衣韜武光

皇藏三日月

鵲渡二星霜

終鐘而白蘆穗橘尾子

孟十登菊香平頭雙

白宮諸第様

仇屐惜鉤坊

日本治花幕

春初調柳相

註曰發端之聯全大和新格ニテ郭云ハ和歌ノ情ヲ結

杜若ハ俳諧ノ次女ヲ云スニ様ハ凡雅ノ本懐ト云ハ本ヨリ漢家ノ

判ヲ見ルニ生親ト植物ノ對ハ文法詩格ノ常ナルヲ何トテ中古ノ

聯句ヨリ古人ノ法格ヲ失ケテ然レ今ノ移スル所ハ郭云ノ松ニ

杜若ノ鶴ト當季ノ花鳥ヲ錯綜シテ郭杜公若ノ字意

ヲ配リ独雙又ノ數量ヲ合セタルニ是レハ多ニ效トナリ

▲此聯ハ謎文ナリ離ハ板橋ノ中断ニ喩ハ肺ハ五臟ノ金ヲ貯フ

離ハ肺金ハ五行ノ意對ニシテ臟ト藏トハ通用ナカラ

卦字ニ高絶ノ對トスハ例ノ觀ハ杜若ニ橋ノ一字ヲ

寄セテ卦名ニ假橋ノ次女ヲ見キナリ

▲此聯ハ假對ナラバ凡月ニ大和ノ働ヲ移スレ然ルニ古風レ當

トハ論語ノ詞ニ安ヲ認タル儒者ノ養生ヲ失ルナリト堀ノ

一字ハ筆耕ノ語勢ヨリ當季ニ句作ノ働ト云ク炊堀ノ

▲此聯ハ俳諧ニシテ移ス所ハ一トト山次トノ字對ノ配ヲ見ル

ヘキナリ論語ニ季子文子ト思ト云ルヨリ句情ハ無道

ノ世ヲ隱シテ鑿ノ如ク穴居ストソ邦無道則隱ト云ル

▲此聯ハ古語ノ裁入ナリ論語ニ東^テ善^キ賈^シ而^{シテ}沽^シ諸^トアリ
 對ハ小町カ侍ナリ幸都^ニ安^シ小町ニ痛^クリヤ小町^ノカ
 一ハ優^ク女^ノトアリテ首^ニ裏^ラ掛^{スル}食^ハ様^ヲ云^フ
 然^レハ對^ノ稱^{スル}所^ハ茶^ヲ今^ト木^綿ト^ノ俗^談ヲ^用得^テ觀^ハ
 但^シ宰^人人^躰ト^見ル^{ヘシ}

▲此聯ハ一巻ノ奇絶ト云シ鶴^ト傳^リ三古^ノ歌^ヲ播^キ猿^ノ王^ニ三古^ノ
 詩^ヲ採^ル増^テ桂^川ノ用^ヲ評^セハ歌^仙ハ例^ノニ花^ニ月^ナト
 或^ハ見^渡二月^ヲ含^タ桂^ノ舞^情ヲ稱^ス去^レハ名^所ト云^フ
 人^名ト云^フ偏^差ヲモ對^シ心得^{アリ}テ蘭^ト桂^トハ絲^ニ圭^ニ
 對^シ寺^ト川^トハ其^名ノ寄^{ナリ}譬^ハ八^角士^ニ暖^域ト對^セ
 ハ中古^ノ靡^学ト云^キヤ觀^ハ小^町ニ逢^テ取^ル角^{ナリ}

▲此聯ハ連歌ノ後和トモ云ハン二句共ニ詩歌ノ詞ヲ攝^テ
 觀^ハ人^望ノ限^{ナキ}觀^相ナリ此^等ヲ聯^句ノ地^ト知^{ヘシ}
 ▲此聯ハ俳諧ニシテ衛^士ノ油^賣ヲ待^夏ハ四^式モ裏^テ皇^居
 ノ流行^様ヲ云^ル例^ニ所^向ノ觀^ナラ待^ル子^ニ作^者
 稱^スレ本^{ヨリ}衛^士ト^代官^トハ官^職ハ口^ナラ字^意ノ配^ラ
 稱^スク由^ト末^トノ附^合ハ俳^諧ノ笑^言ヲ稱^スヘン但^シ
 御^年貢^ノ末^ノ賣^買傳^止ノ制^札ハ代^官所^ノ定^法

▲此聯ハ一轉^{シテ}是^{ヨリ}二折^ノ曲^節ヲ^尺シ^テ多^{ナリ}平^家ニ^叙
 申^ハ中^族ノ意^對ニシテ花^蝶ハ例^ノ大^和風^{ナリ}去^レハ佛^功徒^ヲ
 ヲ讚^シ譬^言ハ蝶^ノ花^香ヲ掌^ルカ如^ク面^生ハ其^徒ニ^偈ヘトモ
 曾^テ其^跡ヲ^見スト云^ル遺^教ノ意^ヲ攝^スルナリ但^シ代^官ノ觀^ニ
 平^家ノ裏^ヘヲ附^スル家^語ニ可^政ノ諷^詞ト知^{ヘシ}
 ▲此聯ハ一成^ノ俳^諧ニシテ仏^前ノ供^物ニ^油ヲ^置スル彼^岸ノ

▲此聯ハ和漢ヲ錯綜シテ別三格ノ備アリト云ハレ史記列傳
 在阜^{キテ}尽^{キテ}良^{キテ}了^{キテ}藏^トハ韓信カ武功ヲ評シタレハ月ニハ
 前ノ光^ノ字ヲ顧テ聯句ニ附心ノ奇絶ト云シ増テヤ古語
 ヲ翻轉シテ阜ノ藏トハ夕會ノ會叙ナリ惣テ故友
 ヲ株リ古語ヲ摘ム夏ハ此儻ニ效キナリ 鶴ノ霜ハ古歌ノ
 歳入ナリ但シ之曰ニ二星ノ如キ 音訓ノ附合モ亦有レシ
 強テ二星ト和訓スヤラス日星ハ例ノ假對ナレハナリ
 ▲此聯ハ句作ノ奇絶ト云シ晨鐘ニ而ハノハヲ残シテ東白ノ
 様ヲ云ルルサシ穂ハ橋ノ顧ナリ増テ其對ナリナ時深
 切ヲ以テ平音ト成セル此等ヲ聯句ノ文覺ト答言レ但シ
 及^テ花^ノ不^レ及^カ香^トト云ル古詩ノ詞ヲ轉シテカラ白^ノ及^ルニ
 ニ及^ル叙ノ儻ヲ稱スレシ

▲此聯ハ名残ノ曲節ニシテ顧ハ所ノ遊宴ナリ 四ノ好色ノ徒
 人ヲ第ト云テ 某^ノ獲^ト云ルハ 歌^ノ舞^ノ地^ノ凡^ク言^{ナリ} 源^ノ氏^ニ
 白^ノ宮^{ナリ}ノ様^ノ字^ニ俳^ノ倡^ヲ尽^クナリト云シ 仇^ノ殿^ハ頼^朝ナリ宮
 殿^ノノ字^對ヲ稱^スレシ 蓮^ノ生^ノ坊^ノ鉦^ノ夏^ハ少^ノ泉^向答^要美^ニ是^レ
 ▲此聯ノ錄^倉ヲ顧テ當時ニ文^平ノ結^文ナリ 柳^箱ハ礼^哭ニテ
 重^ト羊^トニ吉^山ノ所^決アリ 怨^ルニ此^對ヲ穿^牙致^重セハ柳^箱ハ
 柳^箱箱^ニシテ依^主ト自^業トノ叙^文ニ據^スハ花^花ニ對^ス
 今^ノ花^幕ニ對^セ子^ト我^ノ行^ノ俳^式ニ月^花ノ句^ハ指^テ記^吟
 セス一^座ノ首^尾ヲ先^トスレシ然^レハ拳^句ハ方^論ニシテ其^日
 其^時ノ用^ヲ知^テ法^ニ泥^スラ時^宜ト云ハるニ俳^語ノ會^法ナ
 ラ知^ラハ凡^雅ハ今^日ノ儻^遊ナラ知^レトフ
 源^云け一^美ト云^ハ所^ノ成^ハレ^テ運^テレ^ル物^ノめ^モ也^ト云^ハク

けけの又様一丈和聯句の儘あれど 町を宿叢の聯句
ととくらりし 喜句とふおほくも 詞と擧がりけり
折こころと 喜句と對句とに 入替れり 草頭雙と
連二の聯句とありて 楯尾子と白ねり 喜句と
て 實の事とあれしと 作と成れしと 尾の事と
楯の子とたつれしと 狐と擧がり 此通稱あり
竹と花とあり 聯句と名ありしと ことと
そん 傳しと 雙詞と 文遊の傳類と
るる一

○聯類

大小聯 並序

藤巴雀

聯とりりし 擧がりて かなも たるの 杖と
と 趙宋の 比此 地お 寺より 杖と 杖と 鶴とい
望も ともと 聯といひ 仰南 神跡の 居敷と
あ一 野店 山花の 風流と ありし 事と 經書の
一對 宿文の 一聯と 杖と ありし たるの 杖と 擧
たし 吟し 聯といひ ありし 比此 今 毎二 牧
よ 望し ともと 一 杖の 杖と 一 聯の 法ありし 一 言
て 又 字七 字ありし 事と 聯といひ ありし 事と
月次 の 大小 と 杖の 長と 裏と 比此 下 されと 大小 額
といひ ありし 事と 杖の 長と 裏と 比此 下 されと 大小 額

上文章の優海とある一清連珠とを影射の一
名也格と文選の陸士衡の文とある一今の序者
は武藤氏あり一尾の城下は恒より又春田舎を此
の序ありとある

園口聯

おとしと唇

あおむら

芭蕉老人

○評云け者るのそくも唐詩のこまぢちり抱しちり
芭蕉庵の花びらちりと洛のききよちりあむ清
屋柿舎の藤とあむちり一担持の一行地といて
そおむとせしやれちりちり

堪忍聯

子訓詩

張昇角

上はふとく馬しゆぢれ 了場の橋北りとせ果ちり
んをんしやいとせぢれ 比の柳の氷とけけく

○評云此詩は子訓の格とありて一こと起録と列二は
と張張とあり起るの踏かきいけちりやこれと
大和の新格とあり一作者は文皇序と各録あり

鑑亭聯

東花坊

山とをくらねむとるんちりちり

とらせ律一戒の産降らりまると。むらうけゆらひ大伴
のたとしてらうらの空固ちる色と。あはまのやま
上人のあくと盛下らりも澤さうしてんとこおきり注たう
せうゆらたうや字くらも世のらりの底さうゆられ
らうらうも孫うらまうとやまうとやうとて蓬
のうらあたらりも満あむたうまはたとゆらうゆら
とらうらうらう

○註曰○又選^ニ越身業^ニ南枝^ニ胡馬嘶^ニ北風^ニ云々世意故郷
ヲ思フ直ナリトフ△厚カ鳴モ玉鋪モ東ト都トノ枕詞ナリ
枕詞ノ夏ハ道理ノ有無ヲ論スラウス故矣トハ世類ナリト

○滿所滿之、マの申とゆらきと人おちりけさり
ゆらあゆらのまゆゆ△水相觀ハ觀經ニ十之觀ノ一ナリ月光
童子ノ故矣ナリ細拳ニ及ス△高僧傳惠遠法師勉^下
六時礼讃云其後ニ善導上人所礼讃ノ偈ヲ佳ホノ給ナリ
トフ△阿陀經ニ七重行樹皆是四宝云同經有七宝他
八印使水云△無量壽經隨應而現云同經石味飲食
自然盈滿云○玉掃^{シク}司^シ葉^フ平^ス云々足安ハ山下云々
削ニ和歌ノ枕詞ナリ△荀子云不可已青出於藍而
青於藍^{ヨリ}氷出於水而寒於水^{ヨリ}
○浮云はまのあゆの自りまう湖南の百を説し秘
系とらゆらうおくあうとらうかきこみゆらう
け序の文勢とゆらうあふらう私号のぬらうと求

ては極好しあまひなまありては川持あまふ首飾の
以て常人とあまふもあまふ持の時とあまふもあまふも
皆そそ天のあまふあまふもあまふもあまふもあまふも
あまふもあまふもあまふもあまふもあまふもあまふも

○註曰直道遊之字ハ在子ノ篇各ナリ逸註遊息有在天
遊也云梅スルニ此序ハ東濃ノ書ナリ又ト羽集集ニ在子ノ篇各
ヲ假テ四季ノ狩ヲ分ケ其ニ一ノ篇ノ序詞ナリ羽集上ノ羽集註
ノ意ヲ運ヘリトフノ詩經ニ鳥鳥居天魚躍例ハ羽集傳
丁固字ニ仙術也鳥白鶴也ハ仙祖統紀ニ觀音ノ美女ト化
シテ馬部婦ト成玉ヲ食アリ例ノ十九應身ナリ
○作云は序ハ今ク在子ノ又作ナリト云ふ本も歎め各

入寓とて遊の一字と形容とて丁固と親善との例
似たりこと存子とて地とて丁固の鼓舞といはれせ
次や四事道の道意と貴族有初の親おとまはれ遊人
の昔もよとてあまふもあまふもあまふもあまふもあまふも
の刀とてあまふもあまふもあまふもあまふもあまふも
祖又三歳とてあまふもあまふもあまふもあまふもあまふも
あまふもあまふもあまふもあまふもあまふもあまふも

二見文其墨繪序

張昇南

あまふもあまふもあまふもあまふもあまふもあまふも
あまふもあまふもあまふもあまふもあまふもあまふも
あまふもあまふもあまふもあまふもあまふもあまふも
あまふもあまふもあまふもあまふもあまふもあまふも

とかまのそとけりよ人の心程とまゝに〜我らありぬれ
 あまうありぬれと〜さうさうのすけりぬれと〜すけりぬれ
 のまゝと〜さうさうのすけりぬれと〜すけりぬれ
 塗人の月と〜さうさうのすけりぬれと〜すけりぬれ
 心程のありぬれと〜さうさうのすけりぬれと〜すけりぬれ
 廻ねと〜さうさうのすけりぬれと〜すけりぬれ
 てな〜さうさうのすけりぬれと〜すけりぬれ
 く削のありぬれと〜さうさうのすけりぬれと〜すけりぬれ
 心程のありぬれと〜さうさうのすけりぬれと〜すけりぬれ
 そ〜さうさうのすけりぬれと〜さうさうのすけりぬれと〜すけりぬれ

袖とありぬれと〜さうさうのすけりぬれと〜すけりぬれ
 も〜さうさうのすけりぬれと〜さうさうのすけりぬれと〜すけりぬれ
 ありぬれと〜さうさうのすけりぬれと〜すけりぬれ
 は〜さうさうのすけりぬれと〜さうさうのすけりぬれと〜すけりぬれ
 ら〜さうさうのすけりぬれと〜さうさうのすけりぬれと〜すけりぬれ
 も〜さうさうのすけりぬれと〜さうさうのすけりぬれと〜すけりぬれ
 氣弱生野のけ〜さうさうのすけりぬれと〜さうさうのすけりぬれと〜すけりぬれ
 ありぬれと〜さうさうのすけりぬれと〜さうさうのすけりぬれと〜すけりぬれ
 天〜さうさうのすけりぬれと〜さうさうのすけりぬれと〜すけりぬれ

○註句○ありぬれと〜さうさうのすけりぬれと〜すけりぬれ

く一夜といふらんしをばい△奉長茶と名入祖の歌言
 たり十論法式下出たり △殿封田名史三金毛九尾野狐
 ありテ祖三上化して国家ヲ乱セリト細奉ニ及ハス△古今集
 序終のゆふ八咫田川とありぬみまをい帝の法用と臨と
 んらひ△長あひくうゆふのゆらうそ人ぬらういそく
 とのいふむいぬきり △厚玉ハ夜と云く園ト云元枕詞り
 去ルテ肩墨ノ詞寄セえ俳諧ノ微中ヲ称スレ世等ハ句對ニ
 似テ凡是ヲ文對ト知テナリ △羊頭ヲ轉ト成ト羊頭ヲ
 掌ト成セルハ中古ノ檀林嘯ニ在リ物語ノニテノ起結ナリ
 △噓州ト百題ノ用ナカラ噓ノ字ヲ夜寔ノ物結ト成セル
 文ノ新續ヲ見キナリ
 ○漢云けはらと虹早のそくをに一冊の授けの物

らりこくと葉くとをあるもくハ能治くこまり
 つまらして一箇の林もろふハ九尾と七尾の詞の富
 けりアキ子の化ゆめかきくゆひまはまはた能治
 の有物語してあー休者とも名城とて能治の
 七尾は信じて者来よハ使く極多しと或も一鬼橋
 こしヤカゆまくと一葉の能治とあー

愛百合序 並詩

東乙文

我南水陸州木之花者徒梅也櫻之咲日
 惜藤山吹之春而愛牡丹則思芳茶居愛

東坡志林卷三
三葉則思水仙歷在有名如董文將之所慕
手習之君愛情者不忌其面影則也于然
牡丹者被生達魏姚之家而盛李唐之間
也則房子之障子殿日居時繪之筆司儼
露而玉妃麼霞湯上之面許殆不耻千金
之價要徒是風通我朝止乎元祿之後者
被麗而菊之名而牡丹者如有而無也葉
增而不染此世之得蓮花之有仰噴要者
愛情者削之可識厚哉友在則所我鄉之
捧菓子者離蓮幽之氣之古風而園植色久

之百合而且培了久灌了不作十二一室
之襟矣共紅白自有品而如頭插了如居
眼了隨風而有為彼地等向了者徒本謂
此花之愛相矣爾有則捧公之所好者和
漢尋他教奇之色而彼方慕卓文君之前
金居此方壽末摘花之假看要友有者所
謂年月屋經了共露不忘給弗其人之本
情正耶但者效或法師之物教奇而可謂
玉色之有色隱者矣乎
百合不誇蘭菊名自斬心芍菜似傾城

こらと捧ふのむねをうけて原身と信じてゐる。こらと捧ふ
これと二塵空の體をうけて信じてゐる。こらと捧ふ
こらと捧ふを越ゆる。東と姓をうけて信じてゐる。
こらと捧ふ。梅溪と梅溪と。梅溪と梅溪と。梅溪と梅溪と。
こらと捧ふ。梅溪と梅溪と。梅溪と梅溪と。梅溪と梅溪と。

文操巻く之終

